

<総括研究報告>

地域・家庭環境の小児に対する影響等に関する研究

主任研究者 高野 陽

小児の健康に及ぼす影響因子については、これまでも多くのものが挙げられてきている。しかし、時代の変化に伴う、小児の疾病構造の変化は、時には、これまでの認識を越えたものとして次々に出現することもある。特に、小児をめぐる養育や環境条件の目まぐるしいばかりの強烈な変容は、弱者である小児の心身の健康障害の発生に対して、非常に顕著な影響をもたらすことは想像に難くない。物理学的・化学的及び生物学的環境条件のみならず、社会的及び人的環境条件に原因が認められると思われる小児の健康障害の早期の発見とその処置対策の樹立・未然に実施される必要のある予防対策の確立は小児の心身の健康問題に携わるものとして、今日ではより早急にそれらの方向性を示すことが期待されている。時代によって激しく変容するこれらの条件の実態をいち早く察知し、適切な把握に努めることが小児保健領域において必要とされている。特に、今日ではその感が強いことはいうまでもない。

さて、その問題の適切な把握と解決対策の基本的事項の検討は、母子保健行政のなかでも、重要な位置にあり、特に、学際的な研究のなかから得られた結果が期待されている。この見地に立ち、出生前を含む小児期全般にわたる長期的視点から小児をとらえ、地域・家庭の環境と養育条件との関連において、

- 1) 先天異常の発生とその予防
- 2) 小児の発育発達状態やその適切な促進
- 3) 小児の事故発生とその予防
- 4) 小児の健康障害とその予防

について、総合的に研究の進展を図ることとし、現代社会における小児の心身の健康問題をとら

えるとともに、これからの小児の望ましい環境・養育条件について追及し、今後の小児保健の向上に寄与することを目的とし、昨年に続き研究を実施し、以下の如く成果を挙げることができた。

上記の目的にそうべく設定された分担研究は4課題であり、

- 1) 先天異常のモニタリング及び対策に関する研究（分担研究者：有馬正高 国立精神神経センター国府台病院院長）
- 2) 小児の発育発達に及ぼす地域・家庭の影響に関する研究（分担研究者：高野 陽 国立公衆衛生院母子保健学部長）
- 3) 小児の事故とその予防に関する研究（分担研究者：田中哲郎 東京医科大学小児科助教授）
- 4) 小児の健康と養育条件に関する研究（分担研究者：岡 宏子 大学セミナーハウス館長）である。

以下、各分担研究の成果を示す。

1) 先天異常のモニタリング及び対策に関する研究

奇形発生の原因を知り、予防及び生後の対策の改善に資することを目的として、奇形発生頻度の継続的調査・奇形発生に関連する環境要因の分析・奇形児の予後について調査が実施されている。奇形発生率については、調査地域を増やして実施されており、一部の奇形では、出生前診断の機会が増加したために、自然もしくは人工的に失われる割合が推定されるようになった。特定の奇形と特定の原因との関係について、放射線・喫煙・母体年齢・VDT業務・発熱などとの関連については引き続きの調査の必要性が強調

された。また、その他の環境要因の奇形発生の危険性の検討が行なわれるべきことの必要性も提示された。奇形児のなかにはH重症心身障害児として養育される生存例も多く、新生児情報の適切な収集によって継続的対策立案の資料整備が必要であることが指摘された。

2) 小児の発育発達に及ぼす地域・家庭の影響に関する研究

古くから小児の健康度の指標として発育発達状態の評価が実施されてきた。その評価基準は今日ではできるだけ多くの因子を検討したうえで作成されることが要望されている。本研究班においては乳児期から思春期に至る小児期全般の健全な成長を見守る必要性から広く養育条件・環境条件に視点をのした発育発達に関する適切な評価・指導ができることを期待した評価基準作成に当たっている。これは健康障害を有する小児の早期発見に有効であることはいまでもない。

出生時からの縦断的研究において、従来までの発育曲線に比してやや小さい値が、これまでの調査結果で得られているが、全ての対象が収集された時点において算出される結果が期待される。発育の地域差を考慮した思春期の発育評価の基準作成に当たっては、思春期小児の身長最大発育年齢を考慮したものが作成可能であることが指摘された。食行動は小児の発育発達に重要な影響を及ぼすが、養育条件によって乳幼児の食行動に明確な差異が認められ、これが発育発達に影響が及ぶことが示唆された。保育に欠ける乳幼児の増加に伴い、保育所保育と発育発達との関連の検討が重要であることが示されている。

3) 小児の事故とその予防に関する研究

疾病による死亡の減少に反し、乳児から小児期全般に、事故による死亡の相対的増加が近年特に顕著になっており、事故防止対策の確立の必要性が強調されるに至った。特に、保健所などの保健指導における指導の貧困さに鑑み、この点の早期の対策確立が必要である。乳幼児の事故の実態の把握に関する研究の持続を、多くの分野において行なうとともに、保健所等で使用できる安全チェックシートの試案を作成し、

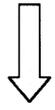
安全教育の現場での活用を検討しており、特に口腔内の事故の実態はこれまでに十分に把握されていなかった点など多くの新しい知見が得られている。事故の発生は乳幼児の発達との関連が強いことを考慮した研究の充実の必要性が示唆されている。

4) 小児の健康と養育条件に関する研究

今日の家庭・社会的養育条件の劣悪化が目立ち、小児の心身の健康障害に直結していることが指摘されており、今日の諸条件に見合った対策の樹立が急務である。乳幼児をはじめ小児に対する親族の虐待は大きな社会問題としてとらえる必要があるが、その原因の究明と虐待において見られる保護者の行動分析が予防対策に対する基本的事項として研究され、多くの新しい結果が得られているとともに、その対策樹立のための社会的認識の確立にはまだまだ多くの問題があることが指摘された。このような実態にあるとき、家庭内の養育における父親の役割は大きなものがあるが、我が国においては父親の養育に関する研究が少ない。今回の調査において父性の成長は乳児の成長につれて変化してくる姿が浮かび出されており、保健指導における有効な資料と期待される。小児にみられる精神保健上の問題や人間関係の歪みの発生には、乳児期からの対人関係の複雑な因子が絡み合っており、その究明の糸口が探り出されようとしている。また家庭内性愛の問題の原因もここにみられる。このような養育条件に問題があり、乳幼児の心身の健康に障害を来したり、健全な生活が営むことが出来ない場合の対策として、乳幼児と家族との遊びを介した養育条件の改善を図ることも必要であり、そのマニュアル作成にあたる研究も実施され、単に1歳児のみを対象とするのではなく、広い視点からの対策に向けてのマニュアル作成にあたることとした。

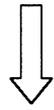
以上、第2年次における研究成果は非常に高く、その進捗状況には敬意に値する。

次年度は、今年度の成果をふまえて、母子保健行政に貢献できる具体的な政策策定のための指針作成に努力したい。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



小児の健康に及ぼす影響因子については、これまでも多くのものが挙げられてきている。しかし、時代の変化に伴う、小児の疾病構造の変化は、時には、これまでの認識を越えたものとして次々に出現することもある。特に、小児をめぐる養育や環境条件の目まぐるしいばかりの強烈な変容は、弱者である小児の心身の健康障害の発生に対して、非常に顕著な影響をもたらすことは想像に難くない。物理学的・化学的及び生物学的環境条件のみならず、社会的及び人的環境条件に原因が認められると思われる小児の健康障害の早期の発見とその処置対策の樹立・未然に実施される必要のある予防対策の確立は小児の心身の健康問題に携わるものとして、今日ではより早急にそれらの方向性を示すことが期待されている。時代によって激しく変容するこれらの条件の実態をいち早く察知し、適切な把握に努めることが小児保健領域において必要とされている。特に、今日ではその感が強いことはいうまでもない。さて、その問題の適切な把握と解決対策の基本的事項の検討は、母子保健行政のなかでも、重要な位置にあり、特に、学際的な研究のなかから得られた結果が期待されている。この見地に立ち、出生前を含む小児期全般にわたる長期的視点から小児をとらえ、地域・家庭の環境と養育条件との関連において、

- 1) 先天異常の発生とその予防
- 2) 小児の発育発達状態やその適切な促進
- 3) 小児の事故発生とその予防
- 4) 小児の健康障害とその予防

について、総合的に研究の進展を図ることとし、現代社会における小児の心身の健康問題をとらえるとともに、これからの小児の望ましい環境・養育条件について追及し、今後の小児保健の向上に寄与することを目的とし、昨年に続き研究を実施し、以下の如く成果を挙げる事ができた。